Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

なぜ岸本捨吉は「懺悔の稿」を書いたのか : 島崎藤村『新生』論

佐藤, 淳

(Citation)
国文学研究ノート,36:33-43

(Issue Date)
2001-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012344

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012344

なぜ岸本捨吉は「懺悔の稿」を書いたのか

――島崎藤村『新生』論――

佐藤　淳

Ⅰ　はじめに

姪こま子の妊娠から出産といった「新生」事件を発端として姪との恋愛を描いた『新生』は、『家』と同様、藤村自身の経験と作中事件とが、極めて緊密に連続しているとされる。経験を作品化するのみならず、執筆中の出来事をも作品に組み込むといった、「自己確証を築くような」[1]自伝的手法を取る以上、作品内部に藤村の自己規定がどのような形であれ組み込まれていることは明らかである。

『新生』はこれまで数多の評により、文学作品としての善し悪しが問われてきた。『新生』の否定的評価として代表的なものは、作家の姿勢の矛盾に対する倫理的道義的な立場からの批判、行き詰まりを感じた藤村が現状打破の手段として『新生』を書いた可能性に対する非難、あるいは作品を論じる際に作家の私生活を無視できないという作品存在そのものへの批判である。[2]肯定的評価としては、作家生命を賭した勇気を認める告白文学・懺悔文学としての評価、または浪漫主義作家の名残を留める点に散文叙事詩としての評価などが見受けられる。[3]

『新生』は執筆の時期的にはもちろん、問題意識の方向性においても、前編と後編とに分裂のあることが指摘されている。瀬沼茂樹氏はこの分裂について、前編は「道義的反省」を描いた「贖罪の書」、後編は「一種の新しい倫理的な信念の追求」を主題とする「福音の書」[4]と解釈している。

『新生』は、後編作中において、主人公の書く「懺悔の稿」と重ねられる。前編を「贖罪の書」と捉えるような視点は、この「懺悔の稿」から出てきたものと考えられる。後編の「懺悔」以降の章の作品化は、執筆開始時の藤村にとっては未定であっただろう。後編の大部分が「上巻発表によって動かされた実生活にもとづく」[5]ものであっただろうことも指摘されている。こうした執筆モメントや時期的な問題から、現実的な自己救済策としての『新生』執筆動機などが非難されたのは当然だが、本論で重視したいのは「懺悔の稿」がどのような契機から出たものかということである。

〈『新生』＝「懺悔の稿」〉という図式は、具体的にどのよう

にしてもたらされたものであるのか。作品のテーマの必然性や論理性を無関係に、作家の外部の必要性から導かれたものではないはずである。緻密に構成されたであろう「懺悔」の因子を度外視したまま、『新生』の内容に「告白」「懺悔」されたものという属性を与えてしまうこと自体に、『新生』論の陥り易い循環定義があったように思われる。以下本稿では「懺悔の稿」の出現を詳細に見ることによって、やや複雑すぎる感を与えてきた『新生』の、特に後編の構造を幾分解析したい。なお、本文引用はすべて『島崎藤村全集　第六巻』（昭和二十四年四月新潮社）により、括弧内は前編・後編の章番号を示す。

Ⅱ　「懺悔の稿」の発生

「新生」事件後、大正二年三月二十五日に藤村は東京を離れ、四月十三日にフランス汽船シモン号によって神戸を出港した。姪こま子との関係の処理を次兄広助に託し、フランスに約三年間滞在する。ここまでの経緯は岸本捨吉を主人公とする『新生』前編に描かれる。

藤村がフランスから帰国し、再び神戸に上陸したのは大正五年七月四日のことである。七月八日には兄広助宅の芝二本榎に仮寓、七月中に付近の小間物屋に仕事場を借り[6]、こま子と再び関係し、その関係を作品化する。この帰国後の経緯と作品執筆、世間への発表後までの出来事が、『新生』後編に再構成され、詳細に描かれる。

藤村が前編を執筆し始めたのは大正七年の四月頃とされ、五月から「東京朝日新聞」に連載開始、終了は十月である。ここから四ヶ月のブランクを経て大正八年二月に後編が起稿され、四月から連載された。執筆中の後編に、前編執筆当時の推移を取り込んだ藤村は、その内容を「懺悔の稿」と表現する。「懺悔」の語は、ここに至るまではただの一度も表出されない。

「懺悔」に至る岸本の心情に、一種賭のような告白衝動や、自己告白による自己救済の動機は確かに認められる。しかし藤村の用いた「告白」「懺悔」の言葉が、キリスト教概念に基づいた真の意味からいかに離れたものであったか、ということはここではさして問題としない。伊東一夫氏の指摘[7]するように、藤村のそれは「ルソー的カトリック的告白衝動の存在はみとめられる」ものの「神の前に、或は聴罪師に対して行われ、告白の秘密は厳に守られる」ものではなく、「一般公衆に発表される」点ですでに宗教的な告白ではない、ということを確認しておくにとどめたい。

この後編九十二章において「一切を皆の前に白状したら。」と思いついてから九十四章にかけて、「懺悔」の言葉が多く羅列されている。

自己の破壊にも等しい懺悔――彼は懺悔といふ言葉の意味が果して斯ういふ場合に宛嵌まるか奈何かとは思つたが――（後九十二）

いろ〳〵な人が懺悔を書いた例に倣つて、自分も愚しい著作の形でそれを世間に公にしようと考へるやうに成つた。

（後九十三）

懺悔へ、岸本はどうして斯様な心に成れたらうと時々自分ながらびつくりすることも有つた。（後九十三）

もし懺悔を書くとしたら、その前に節子にだけには話して、彼女の承諾を求めたいと思つたが、何事も未だ彼は話さずに置いた。（後九十四）

岸本はその初冬らしい親しみを増した障子の側で、懺悔を書かうと思ふといふ噺を節子に聞かせて、彼女の承諾を求めようとした。（後百二）

いよ〳〵岸本が思ひ立つた懺悔を書く支度に移る前に（後百四）

岸本は愛宕下の方に居て嫂の遺骸が火葬場の方へ送られたことを聞いた。それを聞いた日から、彼は自分の懺悔の稿を起した。（後百十）

作品の中にいわば〈作中作〉の形で主人公が何らかの手記を取ることはままあることである。しかし「懺悔の稿」は、作品に等しいものとして読者に呈示される。「懺悔」の発生は、読者の『新生』の読みの問題に直接影響する。

「なぜ藤村はあれほど隠そうとのみ苦慮した事件の内容を公にする決意をかためたか」が、平野謙氏の『新生』をひたすら追求した主題であった。もとよりこの結論は「外からの注釈」[7]とされてしまう可能性があったであろうが、氏の「懺悔の稿」の仕組みについての指摘はもっと注目されてもよい。

読者はその「懺悔の稿」をほかならぬ『新生』上巻のことと

として受けとり、そこにいささかの懐疑もさしはさまない。「懺悔の稿」がいかなる標題を持つていたかは明らかでない。だが、読者は大正七年五月一日から十月五日に亘つて東京朝日新聞に連載された島崎藤村作『新生』上編を指すものとして、それを読むしかないのだ。藤村という作者が『新生』という作品を書き、その作品のなかで主人公に一作品を書かせ、読者はそれをも『新生』という作品として受けとるしかないように、作の仕組み自体が成りたつているのである。考えてみれば、読者は合わせ鏡のまんなかに立たされたような混乱を覚えるはずである。[8]

藤村は、作品『新生』を書き出すまでの自分のみならず、書き出した当時の自分（これは未だ執筆中の自分を作品化の延長上に据える）をも描いた。その際藤村は主人公に、「新生」ではなく「懺悔の稿」を書かせる必要があった。この〈「懺悔の稿」＝『新生』〉の図式が作品内に挿入された時点で、『新生』はそれまでの作品内容を覆すような意味を与えられたと考えられる。

Ⅲ　「新生」へ――「incest」の超越

前編で節子に「母となった」ことを告げられた岸本にとって、「叔父と姪」である自分たちが〈父と母〉であることを、真正面から肯定することはおよそ不可能であった。その血の苦しみの観念は、何より節子の父と母、つまり岸本の兄と嫂を念頭に

発生している。

斯うした親類の女の客（＝嫂・引用者註）があつた後では、岸本は節子と顔を見合せることを余計に苦しく思つた。それはただの男と女とが見合せる顔では無くて、叔父と姪との見合せる顔であつた。（中略）その暗い影は、「貴様は実に怪しからん男だ、」といふ兄の義雄の怒つた声を心の底の方で聞くにも勝つて、もつともつと強い力で岸本の心に迫つた。（前二十一　以下、傍線部引用者）

節子との関係を秘密裏に、岸本はフランスへと逃れる。彼は兄と嫂を欺くことの苦痛から、姪との関係を、叔父と姪でありながら父と母であるという赦されぬものとして捉え、また二人の恋愛を不徳の行為としていた。

彼は以前にこの下宿に泊つて居た慶應の留学生からある独逸語を聞いたことがある。その言葉が英語の incest を意味して居て、偏った頭脳のものの間に見出されるひとつの病的な特徴であると説明されたときは、そんな言葉を聞いた丈でもぎよつとした。（前八十八）

「incest」の概念は、フランス滞在中もずっと、見ぬ振りをしつつも断ちきることの不可能であった、罪の意識の根源であった。後編において、節子を結婚させ自らも結婚する意志をもって帰国した岸本は、再び節子と関係を持つ。以後の岸本の態度の変化には、その関係を何とかして肯定しようとする涙ぐましい努力が見られる。

「罪を罪で洗ひ、過ちで過ちを洗はうとするような哀しい心が、そこから芽ぐんで来た」（後四十九）との岸本の心情の変化は、「肉の苦しみ」から出発した姪との関係を「どうにかして活かしたい」（後五十）と考えるまでに至る。ここから「彼自身と姪との関係」（後四十九）をも「何となく變質したもの」（同前）として捉える岸本は、その関係性に新たな意義を見出そうとする。

彼らの恋愛が罪意識から離れ、新たな精神愛へと発展するのは後編四十九章からのことである。以降「二人の間の新しい心」「生の歓び」「新しい愛の世界」「新しい歓び」などの言葉が六十章にかけて並べられ、確かに小説『新生』の語にふさわしい散文詩的展開を見せている。薮禎子氏の指摘するように、「『新生』という語の発想は、こうした愉楽の中から基本的に出てきたように思われる。（中略）小説『新生』は、つまり、ここを逆に出発点とし、大前提とすることで成立して行った」[9]ことは想像される。「incest」概念を克服し、叔父と姪との恋愛を否定から肯定へと展開する過程には、瀬沼氏の言う「高次の愛の形成を行う一種の新しい倫理的な信念の追求」を見ることも出来る。

前編において姪の妊娠が発覚した際、岸本はその事実におのの き、逃げ出す他はなかった。しかし後編においては、その血の宿命を乗り越えるところに「新生」の礎があったと言える。姪との恋愛に見出した歓びを貫こうとする情熱と、法的には結婚を許されぬ[10]関係である現実を冷静に見つめる心との葛藤は、藤村自身苦しんだものであっただろう。これらの描写と前後す

る「アベラアルとエロイズ」は、精神的な愛情を暗示するものとして二人の会話に上る（後七十・七十六）。また「中野の友人」の訳詩の象徴的な引用（後百一）は、二人の関係が新たに静かな宗教的情調を帯び、落ちついた愛情を保ち得ることを暗示している。

漸く岸本は自分の情熱の支配者であることが出来た。そのために煩はされるといふことが無くなった。彼は中野の友人が譯した歌のこゝろを、愛しようとするものと愛されようとするものの合致から流れてくる音楽として想像して見た。（中略）どうやら彼はその音楽を見つけることの出来るやうな愛の世界に辿り着いた。（後百一）

この章は確かに冒頭の「中野の友人」の手紙と呼応し、藤村が『新生』前編執筆当初から温めていたであろう「新生」の世界が描かれている。「incest」の現世的な呪縛から離れ、〈叔父と姪〉との恋愛を肯定し得たことから、「新生」という世界に辿り着いたことを示す。

「incest」の否定から超越へ、そして「新生」へ。これが前・後編を通して見られる、一貫した『新生』のモティーフである。

Ⅳ　「懺悔の稿」へ――「incest」の再否定

彼は節子と自分の間に見つけた新しい心が、その眞實が、長いこと自分の考へ苦しんで来た舊い道徳とは相容れないものであることを知つて来た。人生は大きい。この世に成就しがたいもので、しかも眞實なものがいくらもある。（中略）彼は一門の名譽のために自分の失敗を人知れず葬り隠して呉れたやうな、あの義雄兄との別れ路に立たせられたことをつくづく感じて来た。（後六十五　傍線引用者）

辿り着いた「新生」の世界を真実のものとしつつ、それを黙秘することの抵抗は、既に岸本の中に芽生えていた。ここには、節子との関係を否定的に断ち切ろうとする、または節子との関係を「懺悔」すべきものとしてとらえようとする意図は見られない。事実このような心情から、作品『新生』までの青写真が、藤村の内部において顕在化し始めたのかもしれない。しかし「懺悔」に至る岸本の心情は、「新生」のモティーフと撞着する方向性を持つ。

姪との恋愛関係について、岸本は常に「冷熱を繰返」す存在として描かれる。冷静な心持ちになると、節子に対して誠意ある情熱は、「荒びたパッション」「激しいパッション」として説明される。叔父と姪との関係を再三「冷かな心持」から現実的に捉える岸本には、常に情熱との対立する葛藤があった。またその冷静な心から「二人の出発点」を「本当に彼女と一緒に成ることも出来なければ、さうかと言つて彼女から離れて居ることも出来ないやうな位置にあつた」（後九十一）と規定したところに、岸本が自己内省からから「白状」に至る立脚点があった。

幾度となく彼は義雄兄の前に、斯の下宿まで辿り着いた自分の道筋を――節子と自分との一切の関係を打明けようと

思ひ立たないでは無かつた。「お前達は叔父と姪ではないか。お前達の為ることは結局不徳の継続ではないか。」兄の答へを想像すると斯の言葉に尽きて居た。さう思う度に岸本は嘆息して、持前の沈黙に帰つて行つた。（後八十六　傍線部引用者）

ここには、岸本の背反する二つの意識が露呈している。一つは兄に打ち明けようとする「一切の関係」の内容、すなわち帰国後節子と関係が復活し、「現在」も未だ節子と恋愛関係にあることである。これは「懺悔」の内容のすり替えとして、次章で検証する。もう一つは、「incest」に対する罪意識が前編の岸本と同様に、兄の声を想像することによって復活し、再び姪との恋愛関係を秘する方向へ誘導されていることである。「新生」世界を展開する以前の岸本の理屈が、「新生」から「懺悔」へ至る中で蒸し返されている。

「incest」は、節子の父親と母親に対する罪悪感からは、どうあっても切り離すことの出来ない意識であった。嫂宛てに書く「詫の心」は、節子との恋愛関係をさらに強く否定する効果を持つ。

岸本が実際に自分の為たことを皆の前に白状してしまはうと思つて、本気でその支度に取り掛らうとしたのも、嫂に宛てた手紙を書いたときからであつた。（中略）岸本は愛宕下の方に居て嫂の遺骸が火葬場の方へ送られたことを聞いた。それを聞いた日から、彼は自分の懺悔の稿を起した。（後百八～百十　傍線部引用者）

岸本は、一度は肯定した姪との恋愛関係を、再び否定してしまった。「新生」から「懺悔」への歪曲の種はここに胚胎している。藤村は築き上げた「新生」世界を壊すかのような形で、『新生』を「懺悔」として表出するのである。

「懺悔の稿」に至る岸本の「新生」からの退行は、兄と嫂に対する罪意識に即して進められ、それは理論上は「incest」の問題の蒸し返しという形で示されている。その罪悪感の根底にあったものが、瀬沼氏のいう「新しい倫理的な信念の追求」からはかけ離れた、「舊い道徳」であることは言うまでもない。兄と嫂に対しては、岸本と節子とはあくまで叔父・姪であって、父・母ではあり得なかった。これが『新生』に「懺悔の稿」の構造を組み込んで行った原因であり、後編執筆中の藤村が、「懺悔」に単なる世間への発表以上の意味合いを包摂していった行程ではなかったか。

青野季吉氏は、「神を喪つた人間が、あくまで自力で死からよみがへるための告白や懺悔に、まるで矛盾がなく、みぢんも曇りも自己欺瞞も、時としては意識した嘘さへも混らないといふことの不可能なことは、はじめから分り切つたこと」[11]と述べる。しかし、〈『新生』＝「懺悔」〉とすればなおのこと、作品内部の「新生」「懺悔」のモティーフは、矛盾どころか、極めて整然とした図式の反転なのである。

V 「懺悔」の重層性

『新生』後編の描写では、帰国直後、兄の家に世話になった岸本が付近に仕事場を借りるのは、「九月のはじめから」（後三十七）と事実とは約二ヶ月の時間差を見せる。年月日なども極めて精密に取り入れられた『新生』に、このようなずれがあるのは、藤村流の手法であったと見てよい。

岸本は節子の「低気壓」に幾度も不可解を感じ、兄の家の台所で節子に接吻を与え、翌八月妻の忌日に節子と子供たちを連れて墓参りをした後、「九月から」借りた仕事場で節子と縒りを戻す。姪と再び肉体関係を持つまでには、岸本はこれだけの段階を踏まなければならなかった。金の問題・節子の「低気壓」・妻の死の確認を経て、節子を「救ひたい」という感情を吐露してからでなくては、関係を復活させてはならなかったのである。時間差と言うよりも、こうした巧妙な出来事の配置設定を考えれば、『新生』執筆時に、藤村の対世間的な配慮があったことは否めない。

「懺悔の稿」周囲に見られる、節子からの詳細な手紙や「創作」・嫂への手紙・ルソーの「懺悔」・兄への手紙や兄からの絶交状などは、いかにも「懺悔の稿」にあわせた周到な作業であったかに見える。効果的に並べられた手紙などが実在し、藤村がその事実を忠実に再現したとしても、これらをも〈作中作〉と呼び得るならば、『新生』ほど〈作中作〉の多い小説は珍しいと言ってよい。そして「懺悔の稿」がこれらの〈作中作〉中に置かれていることは、「懺悔」による構造の歪みを確認する上で重要であろう。

「懺悔」が世間への発表という意図から、別の意味合いを含むようになることは、「春」の内容からも理解される。藤村の長篇に、再生の〈春〉と、その準備期間として堪え忍ぶ〈冬〉との一定のパターンがあることはよく指摘される[12]。「死の中から持来す回生の力――それは（中略）また彼自身の熱い望みであった。春が待たれた」という前編の末尾は、後編一章の、春となり「還るのを赦されるのだ」（傍線部引用者）との描写につながる。

フランスから帰国する岸本の心情は、「抑制と忍耐との三年近い苦行（？）をまがりなりにも守りつゞけてきたことは多少なりとも彼の旅の心を軽くした」（後一　傍線部引用者）と描かれる。この回顧は、三年もの外国生活が、兄と嫂を顧慮した謹慎の概念であり、その謹慎が解けたことの認識を示している。「春」は岸本の「苦行」の終焉にふさわしい象徴としての時節であり、また赦しの指標でもあった。さらに「新生」から「懺悔」へとモティーフが反転する中で、姪との二度目の関係の隠蔽の終焉としても、「春」が用いられている。

「わたしどもほど、幸福な春を迎へるものがまたと御座いませうか」との節子の手紙に対する、「自分等二人ほどと彼女が言つて見せた幸福な春は、まだ〳〵岸本には遠いところにあるとしか思はれなかつた」（後六十六）との岸本の心情は、節子

の「春」の認識との相違を示している。岸本にとっての「春」とは、「新生」の世界の延長を未来図として描くものではなかった。「岸本の待侘びて居たやうな春」は、節子の置いて行った手帳によって近づく気配を見せる。

「自分は何故こんなに奥深く思ひを秘めて置かなければ成らないのか。（中略）あの厚い氷が温かい春の光に逢つて次第に溶けて行くやうに、私の唇もきつと溶けて行くにちがひない。早く〳〵自由に思ひのまゝを話すことが出来たら、私はどんなに嬉しからう。」（後七十二）

という節子の心情吐露を岸本は知るのだが、節子の話が具体的に何であったかは記されてはおらず、この手帳の記述はそのまま岸本の「春」として利用された感がある。岸本の「春」、すなわち隠蔽の苦痛の終焉としての「春」の兆しが、節子の手帳に重ねらているのである。「二人の間に生れた子供の話が出れば出るほど岸本はきびしい現実の感じを誘はれた」（後八十三）と言うように、〈母と父〉であることを否定することによる「懺悔」への志向が、節子の手帳を介して細密に描かれている。

こうした〈作中作〉は、嫂への「詫び」の手紙などと共に、「懺悔」の内容に重層性を与えることとなった。兄への二通目の手紙と兄からの絶交状は、岸本の「懺悔の稿」に謹慎すべきものとしての意味を決定的に与えている。

しかし岸本は自分の懺悔が発表される日を待つて、義雄兄宛に手紙を書くつもりであつた。自ら進んで兄の勘当をも受よう、そして謹慎の意をあらはさう、そんなことを考へて居るところへ、思いがけない日に義雄兄が訪ねて来た。

（後百十一　傍線部引用者）

岸本が兄に対して「謹慎」せねばならぬ理由は二つあった。その内容は後篇百十六章から百十七章に述べられるように、兄の努力を無駄にして自分の不徳を世間へ発表したことと、帰国後も節子と再度の関係を持っていたことである。節子との再度の関係を告白する二通目の手紙は、「前に送つたよりは一層書きにくい手紙」として送られる。その結果、「足下は自己を懺悔すと称へながら、相手方の生活を保証することによって不徳を遂行せんとするの形跡あるは、言語道断なりと言ふべし」（後百十九　傍線部引用者）と、兄からの義絶を受けることとなる。ここに兄に「懺悔」すべきものとしての「新生」の姿が完全に形成される。

前編においては、姪との関係をひたすら「隠蔽」することが自己処罰であった。後編半ばにおいては、復活した姪との関係を真の恋愛として「隠さない」ことが「新生」であった。しかし後編末部においては、姪との関係は嫂に「詫び」るもの、兄に「懺悔」するものであり、「新生」は再度「隠蔽」すべきものに帰着して行った。〈作中作〉は、岸本を「懺悔」へ導きつつ、象徴的に『新生』を「懺悔の稿」に繋げてゆく、複数の支柱の役割を果たしているのである。

Ⅵ おわりに

不徳であることを拒否し得なかった「新生」は、「懺悔」すべきものとして、その意味内容の変質が強調されることとなった。作品『新生』と、その内に内包される「新生」が矛盾するのはそのためである。「懺悔の稿」へ至るまでの描写は、『新生』の作品世界の現在的なモティーフが、変化した後に再び元の状態へ戻る際の一連の循環過程である。それはしばしば非難されるような「新生」の語の意味的な矛盾やごまかしではなく、理路整然たる論理の反転の上に、構築され倒壊された姿が表されているのである。これが『新生』を『新生』たらしめた根本の問題、すなわち平野氏の言うように、様々な角度から論じられ得る作品となった構造ではないか。[13]

芥川の「『新生』の主人公ほど老獪な偽善者に出会ったことはなかった」（『或阿呆の一生』）[14]に対して、後に藤村は「荒れすさんだ自分等の心を掘り起して見たら、生きながらの地獄からそのまま、あんな世界に活き返る日も来たと言つて見るつもりであつた」[15]（傍線部引用者）と述べる。しかしまた、この「つもりであった」の言葉はそのまま、「舊い道徳」に対抗する「新生」の姿を描き得なかったことを示している。

「新生」を否定的な意味内容を含む「懺悔」に導き、「新生」のモティーフを反転させてしまったのは、『新生』を執筆する自己を描こうとした藤村から出たものである。後編を執筆し始めた藤村は、あるべき「新生」をいったん描いたにも関わらず、作中で「新生」を描く自己を再構成し得なかった。結果、『新生』は冒頭に象徴されるような世界を「新生」として内部に保ちつつも、「懺悔の稿」によって「新生」の思想価値そのものが逆転するという二律背反を、内部構造に持つ作品となっているのである。

「懺悔の稿」として『新生』を呈示する構成がなければ、小説『新生』はただ姪との関係を勇気を持って描いた、浪漫主義時代を髣髴とさせる新しい散文詩の試みに過ぎない。後の「藤村文庫」では後編は切り捨てられ、前編のみが「寝覚」と改題所収される。その際「今日になつて見ると、これを書いた当時わたしは新生といふ言葉に拘泥し過ぎたことに気づく。新生が新生であるといふのは、それの達成せられないところにある」[16]（「寝覚」附記）と述べたことは、執筆中の藤村が、「懺悔」の『新生』にもたらす論理の反転や、構造上の歪みに無自覚であったことを表白していよう。

「懺悔の稿」の示す〈作品を描く自己を描く〉問題について言えば、藤村が前編を執筆した際の「incest」の否定の論理を、「懺悔の稿」を書く主人公の造形に当てはめてしまった可能性も指摘できる。この〈《自己》を描く自己を描く〉ことの限界を垣間見せるような『新生』は、「懺悔の稿」の存在ゆえに、結果的に文芸上の問題に極めて接近することとなったと思われる。

（註）（敬称略）

（1）篠田一士「評伝的解説」（『現代日本の文学5　島崎藤村』昭和五十年一月　学習研究社）

（2）芥川の「老獪な偽善者」（『或阿呆の一生』）、正宗白鳥「島崎藤村氏について」（『中央公論』大正十五年十月）、平野謙『島崎藤村』（昭和二十三年十一月　五月書房）、藤原藤男「島崎藤村と明治学院」（『聖書の研究』昭和四十三年二月）、伊東一夫『島崎藤村』（昭和四十四年三月　明治書院）等。

（3）青野季吉「新生について」（『島崎藤村全集』月報四号）、吉江喬松「情熱の詩人藤村」（『文章往来』大正十五年四月号）、伊東信吉『島崎藤村の文学』（昭和十一年二月　第一書房）、瀬沼茂樹『島崎藤村』（昭和二十四年四月　世界評論社）、薮禎子「『新生』の基本構造」（『藤女子大学国文学雑誌』昭和四十九年五月）等。

（4）瀬沼茂樹『島崎藤村』（前掲）及び『評伝　島崎藤村』（昭和三十四年七月　実業之日本社）は、前編は「節子にたいする捨吉の愛の存在を認めず、自己の罪過とも、これを中年のアンニュイに基く過誤として自責し、あくまでも『罪の意識』に苦悩する捨吉の道義的反省が描かれている」が、後編は「『罪の意識』が舞台から退き、自己の本能の肯定からこの不倫な関係をもあるがままに是認し、そこに高次の愛の傾城を行う一種の新しい倫理的な信念の追求が主題をなしている」と述べる。

（5）『シンポジウム日本文学十五　島崎藤村』（昭和五十二年八月　学生社）第三章「小説の時間と実生活の時間」

（6）年月日確認は伊東一夫編『島崎藤村事典　新訂版』（昭和五十七年四月　明治書院）及び『島崎藤村全集　第十九巻』（昭和二十六年十月　新潮社）書簡集による。

（7）伊東一夫『島崎藤村研究　近代文学研究方法の諸問題』（前掲）。なお、伊東氏は「懺悔」について宗教性を排してとらえるべきとの的確な指摘をするが、『新生』後編の分裂については、藤村の人格分裂による「二元的な対立」としており、本稿の主旨とは異なった見解を示す。

（8）平野謙は「新生」『島崎藤村』（前掲）において、「懺悔の稿」に関する指摘の後、ジッド『贋金つくり』、徳田秋声『元の枝へ』、森田草平『煤煙』『自叙伝』等を『新生』と比較した上で、「ジッドはそのような創作方法を彼のいわゆる純粋小説論の実験として、近代小説理論の極北を夢みたひとつの実験装置として提出した」とし、また『新生』について「『煤煙』と『自叙伝』とが辛うじて保っている芸術上の一線を超えた領域にまで、それは踏み入っている」と述べる。

（9）薮禎子「『新生』の基本構造」（前掲）は平野謙の藤村批判について、『新生』の作因とのくい違いを指摘し『新生』の主題が再生の期待であったことを検証した上で、平野の理解は「藤村の人生及び文学の全行程から割り出された、いわば外からの注釈で、『新生』内部の問題と

はおのずから性格を異に」しており、「『新生』本来の理にそわない」とする。

(10) 旧民法（明治三十二年四月）第七百六十九条は、直系血族或いは三親等内の傍系血族との間では、結婚を禁止している。有地亨「近親婚」『家族法大系Ⅱ　婚姻』（昭和三十四年六月　有斐閣）によると、民法草案時においては、遺産相続や廃家の危惧から、やむを得ない場合に置いては近親婚を認める箇条を用意していた。しかし議論の結果フランス民法を適用し、例外を省いたとされる。

(11) 青野季吉「新生について」（前掲）。青野は「あのやうな良識的に見て背徳な行為を、あゝいふ形で告白し、懺悔しやうと決意した」ことそのものを評価し、『新生』が「真実の告白であり懺悔であるか否かといつた追求」は「はじめから結論のついた、底のみえすいた議論」とする。

(12) 十川信介報告「藤村の小説の方法」『シンポジウム日本文学十五　島崎藤村』（前掲）第三章など。

(13) 平野謙『島崎藤村』（前掲）

(14) 『芥川龍之介全集　現代日本の文学十一』（昭和四十五年一月　学習研究社）

(15) 「芥川龍之介君のこと」『市井にありて』所収（『島崎藤村全集』前掲）

(16) 『定本藤村文庫』第七篇（昭和十三年六月　新潮社）

（さとうじゅん／本学大学院修士課程）